

1 持続可能なしごとの創出について

(1) 課題の抽出

- ・ 移住して来られる方は、地域内企業への就職をあまり好まれない。サラリーマンをするのなら、都市部です。(県内調査 熊野市担当課)
- ・ 大学を卒業して地域に帰ってきたいと思うが、自分がなりたいなど思っている就職が地域にはない。帰ってきたいが、帰れない。(県内調査 尾鷲高校生との意見交換)
- ・ 移住者が新しいことを始めると、最初良くしてくれていた人が離れていくことがある。移住者は一緒に頑張りましょうと思っているが、地元には地元を取られるのではないかという思いもある。価値観の相違は難しい。(県外調査 移住起業者)
- ・ 緊急雇用はありがたい事業だが、もっと定着できるような正規の確保であったり、何年間か継続して働けるような雇用の確保は考えられないのか。(委員発言)
- ・ 就職でも県内で、南部から北勢に行けるような、県内移動がしやすい方向に結びつきが強くなっていくといい。(委員発言)

(2) しごとを創出するための新しい視点

- ・ 地域に住んでもらうということを考えると、これまで県が取り組んできたことと異なる、形の新しい、しごとへの取組が必要になると思う。(委員発言)
- ・ 儲からなくても住み続けられ、仕事が回り続けるといった新しい視点で仕事を創らないと定着できないのではないか。(委員発言)

(3) 具体例としての施策提案

- ・ 四国が、進学する率の高い関西の大学生に対し、自県に戻るよう熱心に行っているが、三重県もそういったことを分析して、県内に戻ってもらえる就職に繋げていただきたい。(委員発言)
- ・ 農林水産業は現金収入が足りない部分がどうしても出てきやすいので、そこを補うような仕事を生み出せると定着・定住しやすくなるのではないか。(委員発言)

2 地域への理解と愛着を育むキャリア教育について

(1) 課題の抽出

- ・ かつてあった職業学科と地域との結びつきを取り戻す必要がある。(委員発言)
- ・ キャリア教育の理解が教育現場でまだ十分に図られてはいない。(委員発言)
- ・ 親は、高校卒業後に県外への進路選択を薦めている。(県内調査 尾鷲高校生との意見交換)
- ・ 高校から自動的に外へ流れていく形になっている。(委員発言)
- ・ 全ての進学を希望する子どもたちを三重県の大学で受け入れることは不可能である。(委員発言)
- ・ 高校生が地域を隅々まで知り、元気な魅力的な地域の人と出会ったか？(県内調査 資料「尾鷲高校のチャレンジ」)

(2) 県立高校の位置付け

- ・ 高校のあり方は町の地域づくりに直結し、そのことが大きく人口減少に影響している。(委員発言)
- ・ 県立高校は小中学校以上に、更に大きな地域の核となる。(委員発言)
- ・ 地域や社会に貢献しようと主体的に諸活動に取り組む生徒を育成し、その生き生きとした姿を発信して地域の信頼を得ることが求められている。(県内調査 尾鷲高校 今年度学校経営の改革方針)

(3) 具体例としての施策提案

- ・ 授業内容の見直し、学科の見直しもすごく大事なのではないか。(委員発言)
- ・ 高校生ともなれば、地域の人たちと触れ合う中で切磋琢磨していける部分もあり、例え1学級でも、単独の高校として残していくことが大事ではないか。(委員発言)

3 移住の促進について

(1) 課題の抽出

- ・ 移住の促進については、住まいのことは切っても切り離せない部分だと認識している。(委員発言)
- ・ 仏壇があるとか、移住者に貸すことで家の格が落ちて見られるのではないかな等の田舎特有の理由により、空き家の貸借が進まない。(県外調査 移住起業者)
- ・ 都市部の人がある場合に「田舎のルールや基準に従わなければならないよ」というのはよくあるが、逆もあり、都市部の人が多様な価値観を、田舎の集落が受け入れるのも必要だと思っている。(県内調査 熊野市担当課)
- ・ 都会と地域のどちらの感覚も持っているのが、移住者の強みであり、これから来る移住者にも勧めたい。(県外調査 移住起業者)
- ・ 移住以前にも地域には来ていたが、実際住んでみると方言の問題があり、コミュニケーションが取れなかった。(県外調査 移住起業者)
- ・ 実際に現地へ行けない方はHPを見るしかないので、HP、見せ方はすごく大事と思う。(委員発言)
- ・ 熊野市に来たら楽しいということを発信しなければいけない。コンテンツは多いが、移住者への発信ができていない。花火のPRはされているが、移住を考えている人は花火に興味はない。(県内調査 地域おこし協力隊員)
- ・ 三重に移住してもらった場合に、こんな暮らしができるという受け皿が想像しにくい。暮らし方の特徴が見えてくるようにしてもらいたい。(県外調査 ふるさと回帰支援センター)
- ・ 自分が先に移住していたことで、後の移住者のハードルが低くなった。(県外調査 移住起業者)
- ・ 過疎が特に進んでいるような地域もある中で、県内の移住についての考え方はどうか。(委員発言)

(2) 県に求める移住相談機能の役割

- ・ 空き家について、移住者の希望と貸し手の思いをコーディネートできる機能が必要ではないか。市町にアドバイスできる機能が必要ではないか(委員発言)
- ・ 市の知名度が思っていたより高くなかった。今は市単独でのPRは止めて、全て県と連携している。その中で棲み分け、役割分担もできている。まずはPR・情報発信である。県下の協力隊の横の繋がりもやってもらっ

ており、感謝している。(県内調査 熊野市担当課)

- ・ 市町の取組が重要であり、県の役割として、しっかりとした後方支援がすごく大事だと思う (委員発言)

(3) 具体例としての施策提案

- ・ 移住相談センターのアンケートに、IターンかUターンか、何年後に移住を考えているのか等の項目を増やしてほしい。(委員発言)
- ・ 移住相談に際しては、生の情報を伝えると親近感が湧いて、距離がすごく縮まる。(委員発言)
- ・ 漁業経験があっても支援を受けながら独立漁師になれるという、熊野市の入り口の広さが魅力的だったから、熊野市を選んだ。(県内調査 地域おこし協力隊員)
- ・ 田舎の場合には地縁や血縁があると、受入がスムーズに行く。(委員発言)
- ・ お試しで来るシステムを創ることが必要ではないか。その際に狩猟体験を取り入れると、人が来るのではないか。狩猟の可能性は高い。空き家情報も、空き家自体は多いが、皆が発信していない。(県内調査 地域おこし協力隊員)